

四野戦病院へ入院、六月二十九日と思うが復員船に乗って、九死に一生を得て、かつビルマの助っ人の一兵士の任を完うして、懐かしい家へ帰りました。

今は恩欠連大阪府連吹田支部長として、戦友のため努力していますが、同時に未だに遺骨が帰らぬ亡き戦友の御冥福を祈っております。

## ビルマにおける俘虜生活

長崎県 赤田 恒雄

私は昭和十八年十二月一日現役兵として、大村西部第四七部隊に入隊しました。

入隊後約二ヵ月、一般の初年兵同様に初年兵教育を受けました。二ヵ月後憲兵を志願して採用され、クアランプール南方軍憲兵教習隊に転出し出征することになりました。

教習隊における教育期間は四ヵ月で終了しました。教育終了と共にビルマ地区憲兵司令部に配属が定ま

り、ビルマ・ラングーン憲兵司令部に赴任し、三ヵ月現地における憲兵教育を受けた。その後、マンダレー憲兵隊に所属することとなりました。

マンダレー憲兵隊は山下憲兵少佐殿を長として約五十人位の憲兵が勤務していました。当時の私の階級は伍長で、終戦時軍曹に進級しました。

憲兵隊の日常の仕事は、ビルマ住民のスパイ活動を摘発するのが主な仕事でした。ビルマにおける住民感情は、占領当時から大分様相が異なって、日本軍の旗色が不振に傾くとだんだん悪化して参りました。

服務は通常私服で、しかも住民に扮して頭にターバンを巻いて、腰にロンジーを巻き、足は草履の様な履物を履いて、十四年式拳銃を腰に隠し、言葉もなるべくビルマ語を使用し、現地人になり切った服務でした。

二十年七月頃、マンダレー方面の前線から後退して来た「菊」(第十八師団)「竜」(第五十六師団)の両部隊に追尾して敵の機甲兵団が接近したので、憲兵隊は河船(カヌー)を利用して脱出、モールメンにて終

戦となりました。

終戦と共に憲兵隊は、生田憲兵大佐以下百八十名全員がランゲン刑務所に戦犯容疑として収容されました。それから丸二年間同刑務所での服役でした。

銃殺刑は印度兵が七、八人射手となり、目覆を行って刑務所の前に立たされ、一回に三人位同時に執行されました。銃殺刑の中には目覆は不要だと申し立てて立派に死んだ人もいました。

刑務所長は英軍の大尉で、監視兵は全部印度兵でした。

裁判は刑務所内で、英軍の将校によって行われ、証人は現地人によって行われました。裁判で死刑が決定すると独房に移されます。死刑囚の中には精神状態が混乱し、自分の糞を監視の印度兵に投げつける者もいました。反面英語の本を取り寄せて従容として勉強を続け、死を待つ立派な態度の人もいました。

刑務所内の日常は、労働は草むしり、便所掃除等で軽い労働でしたが、反面一番苦しかった事は食糧事情の粗悪さでした。お粥に米粒が数える程入ったドロド

ロしたものが主食です。痩せて骨と皮だけになりました。所内の食べられるものは鼠も鳩でも何でも口にしました。まして煙草には一番困りました。印度兵の捨てた煙草の吸い殻にバッタのように飛びついて群がりました。茶殻を乾かして煙草の代用として吸ったりしました。

私は二年間刑務所にいましたが、幸いに私を指名する現地人の証人も現れず釈放され、夢にまで見た懐かしい故国に復員する事が出来ました。

復員は昭和二十二年八月十五日佐世保の針尾島でした。私の生家は長崎市内であったので原爆に被災しましたが、父が再建して私を迎えてくれました。